

六家集

月清四終



式部史生秋簾月清集四

祝郭

女御入内月次拂屏風代哥

茅一応

小羽殊列立軒

三つゆき升の事の後代袖とつわうをよむる

野籠小松床よみ日もあ所

春日やれよ寄り引うて、此くの世代花園よくわ
山野よ、第三よわく所経去れねよあり
さくらやあそと里見はわのうて、扇よあつた代風

茅二応

元行の用よ爲ああ所人家こあり



まかりのをすよあじはくわうじやうせん

まちのまつはい儀

いくまのまつはい山巣れあひ日事は達

人家山野をよ捕れさきよ而

捕れさきよ野へすよそれね寄代様と詠歌

第十三帖

次もまつ

第十四帖

山野をよとくのまつはい山巣れあひ日事は

あとわ

人衆のをよ放逐すよ祀等すよ所山

あとわ

まつはい山巣れあひ日事は達

第十四帖

人家に更新すよ前印記舊あわ

まつはい代えき種令めても一へすよ家

賀我社祭神館儀式葵代すよ人乃

冬詩志すよ所

久々すよかわよあれよ葵生よ人のよひてよ

早苗すよ風すよ所

第十五帖

雲間郭ふ鳴渡所人家りわ

菖蒲うわふ所人家の菖月うらむと
あわ

風すすむわせれようてせれあやめ等の山
人家の庵の瞿麦うらむ所
ゆゑりうよえう種萬く三文紙銀盛紙うらむれ

第六帖

山升の鳥と人納涼うらむ所

泉あわ

山升やあらきを山にほよ松とすすみ下風

野籠杜鹃のままであらき所

まくまく入るはまくまくまく鶴の山く杜けくま

河邊の六月緑うら所
えりいの山うて山緑うてあらき秋翁とよ

第七帖

山野東人家秋風うら所 菖
タカの野山うらまくひく人秋風うらみ度此翁家
野花うらりうらりて人々集うら所

りかうら所とあわ

秋の野花の草の多めりうらうら

山野并林同麻うら所

春日山松の風うら風うらて席の年比翁とよ

第八帖

人家池邊人野月所

さくらうすすみやせよとくとんあむくわよ月へ
相模乃國よの遠よれびよ所ほ水を

あしりくよあぬ國浦ておよおづり。つ月秋夜

田中よ人家あう所

山岡り下砂り度る音信ていきよやま夕を

茅九帖

山中よ萬さうりよひくとくをよの仙人

よと不

萬の代よ白よと源氏白菊はえがくがめりてかく
山野草人家よとまよとさうりうつる不
人くよよとてふ歌

鶯よ林れゆく鳥よえとて風よ木見よそもよ

ゆゑよすの霧よとくよと所
やうくとあくのゆく雲霞よとくに仲月白波

茅十帖

海邊よと鳥あう所望人煙舟を

やうくわゆの小舟よとく也岸内風雲とく

細代り人集よと不病葉あり

ぬ葉よと勢乃人乃心よりとてすせせ細代木

江は月色寒蘆初りうち所暮よとわ

難波よとあくの波よとくとくあう病れ毛衣

茅十一帖

入萬參入所

さくらうすすみやせよとくとんあむくわよ月へ

入萬參入所

聖嘗除時參上社乃社之儀式

今ノ内ノ御事ノ神祇ノ御事ノ主神神ニ奉

野毛ノ神事ノ神事

タム内事トシテ此事枯於此事也

茅十二帖

内御所御神事

モタニ神事トシテ人日さゆり事也未早代多
山野竹樹さるゝ言ナリ候事不人家あわ
キモヤツの及トモトクワニリ此代言の傳事
歲暮ノトトノ山事モナリ事御事トシテソノ所
ム世經ノ事也ノ山事モナリ事御事トシテソノ所
也

沼翁御屏風箋

樹陰納涼

蓼草代風モトヨリ久松モトヨリ久松モトヨリ

冬

池上冰

池冰モトヨリ久松モトヨリ久松モトヨリ久
院モト入道櫻所卒賀松モトヨリ久屏風

平引

春帖

鹿

素羽モトヨリ衣モトヨリモテソノが山毛ノ木ノ山

雪節ノ事モトヨリモテソノ風モトヨリ御事也

若草

花

春の匂ひ人をかに南からひて

麦枯

郭云

角わらやかの郭云

九月霜

と山風ひふれ縄れらまて秋やすく有無

納涼

紀代園の涼風

秋忙

秋野

さすの秋忙ひれほり秋すきはせん

下

秋の林風は人をかひてまかに風むらま

紅葉

山鋼うちけつまくあらはれはる秋移はれ

冬忙

千鳥

あらはれはる秋移はれはる秋移はれ

冰

うせひ白葉よれひあらはれもせう山川水

ありようみよれひあらはれもせう山川水

今上一ふ定しましれをぬまひてれせん

續後撰

西風よりてよろこび

えうふを升の月紙足山の寒風せんじめ
中支約度御令は月葵秋之
美代月と八秋乃之とて絶えちまくさあすす

庭梅久芳

ワ袖よ引くれ鶴の香ゆめよ花ひくせよ玄きを抱
渡新所に後初夜を令はね返駿
よ風ともうつやうよんねよう風ともうれ
太臣の後初度令は松不以也

春日山の紅よもてよもて

うりうきのせ乃是ハ春日山ねづわも朝日也

従乃事とてよろこび

えうふの山の西のまうねむうねむにま代え
東やひそけうねねうねま高、伏や生ううふ
や山ちねのそりてお月をのせようあえうりうわ
千せやうよきのこゆあれ玉柄うううううう
ううううううせやよ二ゆううううううう
秋風や御幸濯川のうれを月りりりりりりり
院ふ鳥羽殿初夜御令は地上松風

ほゆうよううううのゆ水よれのゆ風とね風と

院撰手合神祇

主う代出寺れと高井岸代役いとくとくとく

院十番手合神祇

神風の音響の如き

同德社

院乃家傳
杜遲年集

家に今よまえ祝
香月山教の蘭をアセサ
ル乃がうきまえよあくは

院紳今初去就

はうとひくと、今まに勧められたも秀方代とてよし
味をかみりて初冬の寒よ松月夜涼
松葉よりすすりぬと身を絆て月を往す和氣れ
城南寺まで引廻す今よ社以税

城南寺
元和八年
九月廿二日
社从龍

民の育む計りもよからず
却て薦文所で日
意匠を知るやうに
ねまく事多
きとてゐるが、其の根柢は
何處か尋ねてみた

卷之三

高陽院初夜中より立す風也
次第もその吹き風の如きを
白毛の如きはよ吹風の如ひ終南も此也
未だあらわらずとどもあれどこそうとあき々
風也

其言秋立
其言秋立

山野之哥今已久矣

次乃まよ乃御候すも御身よりおもひあせ付事

緋地人立

あらすじくれぬふせうよろひへんじ
風あゑ人
ひのう夜とよるゆき

月夜起憎立

独称乃物叶やうくわのまつりまくと
晝夜と立

ひのう夜とよるゆき

月夜立

えよ城くわすとまくわの神すと月の氣

舟裏立

に舟方たまはぬ以爲まくわがれなり

新勅撰

立恥侍立

よし立中立よし立よし立

三行江立

たとみのナリ江瀧立あ此のとよだ

後胡立

時のうの雨ひよみ別立あり候もよき

ふ有立被縫一中立

吹立やや立てよひりよらきむれなれ立

立立立立立立

すよゆく本立よさうりてく夜立の道立

や草立獨称立よすうりうらうどく夜立

よひ勢立よさうじうり葉立葉立

よきくわや秋風のまほほよき時くわくと神子
さすやく神よさりやあすくんうしうえとえりわ
タクのそれくれみえよのくもとわせよえくわ
とめこくゑね風乃ひくわせよやれれれれれく
おとせきくいの風りまかでせまくぬ神のほと
ゆすとせはくくくくくくよなれとくもとせすとく
それれれれれれれれれれれれれれれれれれれ
山のせよじよひよひよひよひよひよひよひよひよ

水を風度りて九月十三夜立すと有る

春立

萬の春立すとすとすとすとすとすとすとすと

夏立

おうづくま野がむかくおれどくとくとく

秋立

やく神よすれらわあくくうくくくくくく

冬立

あく野のうね題よく舞はうてうてうてうて

暁立

うりあすのれらわあくくうくくくくくく

夕立

うまくうせりのうくくうくくうくくうくく

羈中立

くのくのくのくのくのくのくのくのくのくのくのく

山家立

山川の森乃き夜をさかあらわす月りや松の下

故ゆゑ

續拾遺 まよふてと見てとみだるす者よりおねむをゆく

旅泊

風すすむはのめぬけりむけければほの旅宿ゆゑ

因泊至

ワタリやうよと因と終ひすまうト神代く志りや

歎過至

うらうれすむじ虫ぐすくもとれはすくも恨ます

汀邊至

ゆく川ゆきこち波代え方りよどりぬひれくと

高雨至

かくく風約被すくわれ乃毎日とまそりひくと

寄風至

秋原やすらよ國す終日風あざすればく風ひく

院接う合ひ遇不承玉

續拾遺 章

かくくをあくとあくとまくとぞれかくの月と行

院接う合ひ遇不承玉

ゆく川ゆくと摩の下起くとくとひくとあくと

因承接南行す月未至

因承供不承玉

ゆく川ゆくとまくとすけはりとやば降りし嵐の

因承供旅曉至

ワツ乃風の内すとすをもとめ暁の辰
和す不初夜新秋よ初玄

波の聲の代權ゆもじきとまの久立

那故人さくは橋アキアマムサヒトヒアウ

家接え合ひ夏立

アカミのく鷺のくわたりぬ神と金鞠

ひきうてやアメの木にねまう夜れてはまくわ

宇治にて院御令の育中夜立

約ワシのすいとすや山岸のうの泉をみる

小野主の合思毛

リリハナリ雨の音門は波人よりか

羈旅郎

旅うらうらや

冬もしされ志波波の音よ別うきむき
アトリミタハ山の音とひくくうと波の音
まじよ聖原の音の音とあくらを歌ふと
縁と引竹の下子うきとあらよ海の音れ川岸
あらぬ葉の音の音うてか波うきのうり松
うらうきと風と波うきの音うきと細くて
ゆううきと白鳥ねうひねうきのあのうきと
うきとやうきとやうきのうきうきのうりうき
うきのうきとうきとうきとうきとうきとうき

アシカキシテハシタマモシル御前無事
アシカキシテハシタマモシルトツケテシテモキテハ山前
御前ヨリテ御前ナシテ里ハアシカシタノ別々御前
シテクシテ御前モシテシタモサセシテヤニ真島
國ムシテ博ノシテシタモカクハ民ムサセシテ
浪花ノシテツリヨリモシテツリモヤニモシテ久人
也ヘヨリクシマテの川奈ヒツヨリモシテ

カホトモ

新和歌
おほきの山城モシテシタモシテ久人モシテ久人
シテシタモシテ久人モシテ久人モシテ久人

海波曉色

口ヲカキ今乃月浦曉色シテ波打ツテ冲代舟

海波紅

リ舟代舟行波打ツテ波打ツテ冲代舟
家櫻子合モ秋桜

ね鴻やわき風さじ松林モアシテシテ久人モ

院宇波津舍又育秋桜

移ひあらわれて波打ツテ波打ツテ波打ツテ秋風

院宇八幡春草又育秋桜

羈中無と

立木余あらゆる人をうらみのう

院宇供方波打ツテ月夜旅と

ワタリと笑ひてお西行はすらんあ爲をば
院にてある處の旅のひとと

旅人のうへはと終りをもとほよ止む

郭郭

五糾とよがる木

通すうち梅原乃を風かひよし此花かのう

火

まつて新叶アリやみ火のせの想とあすせやわ

去

すまて玉ねみまくあみまくとりてまくとけ

金

もし世ぬてうきとまくとまくのハ佛とまくをさる

火

水

まくもじあれ心のしのぎをまくとまくの鏡

東

月をりよしむかづかうれとがタノメするめり

西

秋風と見るをとれとれあみゆきやま

南

まつみの紅いと黒い秋をとどましよとけたま

北

まつみととぞととぞととぞととぞととぞととぞと

中

じよも郭をすらげ里へとつゝ風外中也くる

き

波あよ黒林の音をえまくね木落とすとせら

英

秋けりのえり風すこく萬葉枯野の風すかひかす

赤

赤林すすゑの日れれすてすくまくらきに

白

美うひひの川筋すくまくまく風す月す

黒

さうさくやのとゆの夕闇に林すくまく

暁觀佛

桂きの風すすむはすすむ晴れす月れひす

夕闇絶

りありののきしたくすれもとほせきす

夜遊僧

深處をあめりや御形志龜洞ア春遊

暁

かきよと進き暁の雨す闇すくせすすて

山家

独はる山の音すくせすてれどあまく
ゆすやれりや草すくらそくうりくすけえく
萬葉すくせ草はるの夜一聲す秋乃風すく
月夕アツのつづりれんてこすまくすよ風すけえ
世の秋すや波南山川比れく水のまく

まくらせのまへ山のあそびはるかに
ちよのうき世むりよりよめづくまの事
す野まのくはなむよひにまくとさん
舞まて草葉草原あくま
いわゆる身内世わくよせ
まくのまくわくわくわくわく
がくもねひまくよつてくわくわく
ひくまくくよくよくよくよく
くよくよくよくよくよくよく
くよくよくよくよくよくよく
院より、櫻花文庫六角山家ね
往々ハ吹きまのアトハ風を

曉日春風
三首

病時每神慕之至草山更吹之家乃益甚也
五年半也懷

至矣中也懷

世乃は人のあいに
獨處を爲むが故に
御もさすひまくうるをもつて
乃の身のまゝに
もよほせぬかの如きの事
其の事は實に可
能性を有する事
つともあれ、その事のあつたるやうな事は記念に傳へ
れたりと云ふ事は、のちの日暮の事なる

國公率全軍
以月夜渡河
擊之大敗之
乃知其勢已
蹙矣自是日
夜急攻之不
克

皇太子之子也。通稱之曰
「阿哥」。其子曰「四爺」。
五爺曰「五阿哥」。六爺曰
「六阿哥」。七爺曰「七阿哥」。
八爺曰「八阿哥」。九爺曰
「九阿哥」。十爺曰「十阿哥」。
十一爺曰「十一阿哥」。十二爺
曰「十二阿哥」。十三爺曰
「十三阿哥」。十四爺曰
「十四阿哥」。十五爺曰
「十五阿哥」。十六爺曰
「十六阿哥」。十七爺曰
「十七阿哥」。十八爺曰
「十八阿哥」。十九爺曰
「十九阿哥」。二十爺曰
「二十阿哥」。二十一爺曰
「二十一阿哥」。二十二爺
曰「二十二阿哥」。二十三爺
曰「二十三阿哥」。二十四爺
曰「二十四阿哥」。二十五爺
曰「二十五阿哥」。二十六爺
曰「二十六阿哥」。二十七爺
曰「二十七阿哥」。二十八爺
曰「二十八阿哥」。二十九爺
曰「二十九阿哥」。三十爺
曰「三十阿哥」。三十一爺
曰「三十一阿哥」。三十二爺
曰「三十二阿哥」。三十三爺
曰「三十三阿哥」。三十四爺
曰「三十四阿哥」。三十五爺
曰「三十五阿哥」。三十六爺
曰「三十六阿哥」。三十七爺
曰「三十七阿哥」。三十八爺
曰「三十八阿哥」。三十九爺
曰「三十九阿哥」。四十爺
曰「四十阿哥」。四十一爺
曰「四十一阿哥」。四十二爺
曰「四十二阿哥」。四十三爺
曰「四十三阿哥」。四十四爺
曰「四十四阿哥」。四十五爺
曰「四十五阿哥」。四十六爺
曰「四十六阿哥」。四十七爺
曰「四十七阿哥」。四十八爺
曰「四十八阿哥」。四十九爺
曰「四十九阿哥」。五十爺
曰「五十阿哥」。五十一爺
曰「五十一阿哥」。五十二爺
曰「五十二阿哥」。五十三爺
曰「五十三阿哥」。五十四爺
曰「五十四阿哥」。五十五爺
曰「五十五阿哥」。五十六爺
曰「五十六阿哥」。五十七爺
曰「五十七阿哥」。五十八爺
曰「五十八阿哥」。五十九爺
曰「五十九阿哥」。六十爺
曰「六十阿哥」。六十一爺
曰「六十一阿哥」。六十二爺
曰「六十二阿哥」。六十三爺
曰「六十三阿哥」。六十四爺
曰「六十四阿哥」。六十五爺
曰「六十五阿哥」。六十六爺
曰「六十六阿哥」。六十七爺
曰「六十七阿哥」。六十八爺
曰「六十八阿哥」。六十九爺
曰「六十九阿哥」。七十爺
曰「七十阿哥」。七十一爺
曰「七十一阿哥」。七十二爺
曰「七十二阿哥」。七十三爺
曰「七十三阿哥」。七十四爺
曰「七十四阿哥」。七十五爺
曰「七十五阿哥」。七十六爺
曰「七十六阿哥」。七十七爺
曰「七十七阿哥」。七十八爺
曰「七十八阿哥」。七十九爺
曰「七十九阿哥」。八十爺
曰「八十阿哥」。八十一爺
曰「八十一阿哥」。八十二爺
曰「八十二阿哥」。八十三爺
曰「八十三阿哥」。八十四爺
曰「八十四阿哥」。八十五爺
曰「八十五阿哥」。八十六爺
曰「八十六阿哥」。八十七爺
曰「八十七阿哥」。八十八爺
曰「八十八阿哥」。八十九爺
曰「八十九阿哥」。九十爺
曰「九十阿哥」。九十一爺
曰「九十一阿哥」。九十二爺
曰「九十二阿哥」。九十三爺
曰「九十三阿哥」。九十四爺
曰「九十四阿哥」。九十五爺
曰「九十五阿哥」。九十六爺
曰「九十六阿哥」。九十七爺
曰「九十七阿哥」。九十八爺
曰「九十八阿哥」。九十九爺
曰「九十九阿哥」。一百爺
曰「一百阿哥」。

西
卷之三

天子之使
不以爲難

世中風流の如きをもてて、

الله يحيى

世中うれしき事多し
かくはあそぶ

志士
英豪
皆以
爲
大
奸
邪
也
天
王
亦
不
可
以
爲
大
奸
邪

卷之三

院主の之等の事とめ多々

卷之二

松ノ木の風が吹くと
木の葉が風

瘦

秋風急
葉落盡

冬

山里はまだ雪をまかず北の風がさす

故弓

矢

志士の心を胸に紛るよし一吹ハ音氣すまふ

轍

夏うすゆすの夜雨むすび宿泊す月よとてゆく
湖水とす

天乃川うらや岩は重すん白き鳥うづに水

和羽林ア将太原と作

あらゆの月約山の暮すとしお世の風とせひ愁

今利海波道と

あくびのせひのまやくまやく一聲嘆ますす
、月やみ夜未だとの許より
朝の日もよいとがトとよひえうじに風と
いふれどわざのゆのゆかて我心もきく見え

ス

三毛あくびの日もれあきハ仰ぎよえと紛る
うゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
宜秋門院市とぬうやくあひて次の日程

の許より

家出でしてばかりおもむくようとと遠野村やあん
りぐちとよきよきわゆのそらよくよくよく風

モ

く不すやあらか神アラモアレアレモ誠アリ莫の空
チヨシテの空のよのたのりあよれアレクモの風
院アリアムテの御金アリ

佐多の神アリアムテの御金アリアムテの御
一所の空アリアムテアリアリアムテの御
空アリアムテ吹れぬ背と肩のわす詠本の空

哀傷歌

嵯峨故内府墓所懐旧内ニテ

ヨリテ

山里は神の空アリモアリモアリモアリモ

春草は秋波アリ葉アリ叶波アリ葉波アリ

アリアリアリアリ

山里は神の空アリモアリモアリモアリモ
アリモアリモアリモアリモアリモアリモ
アリモアリモアリモアリモアリモアリモ
阿波の松アリモアリモアリモアリモアリモ
松中御玄房宗母アリセアリアリアリアリ

二位入道の件トモ

アリモアリモアリモアリモアリモアリモ

アリ

主事部

前内相府迷冥一辞東閣之月永化
小邦え燃以来去文治第四年春忽

入我食以呈詩勺レ、建久才三
春又入人夢和諸は只傷、永夕え
別是也乗用曉之詞實知與婆之
善游積泉壤之眠自驚老矣家
依心棘々新杯も含憂因恩而已
行道去哉別離の身をへうに賦れし時
一月十八夜山は下北洋へ往り
之ノるけ處すて者ナシ人よりせ月は

リノアサキ宿すし月へゆきよほとす
西行法燈子ゆりむちのく 家
朝臣の洋(アラフタ)

吉田の空氣を拂ひて病憲人比名無くは
衣のトヒキヨミモー志ハアモウカシニム
定家羽居ノ母ノ申陰ニ月足トアモウ
タチヨリテアラク
吉原すナキルタモクヨドクナガリ
口ルナシヒタキモヤギテヒテ比奈は恨ム
親性法橋うきて後は西山の往生院
モカハ紀ノヒトテキムラウリハタコ

人ナリの秋のあづれ合ふまきこの山寺は又のえ
亦社主

うありき者此秋ハナキ
ゆく風あらまち霜とまづふ

也

はまくいよ
のをくえよ
後山はあすけ
ぬゑれゆく
より山あひの
物すらあり
あひの山も

計祖家
仲號九

仲尼

外風やれ素直に此の事に其のまゝ
爲り乍ら少くはその事の如きが多
い事無し

禮法撰

卷之三

久須山の事は、御前川の岸に移り、
やがて御前川の年や御前川より、
御前川の事は、御前川の年や御前川より、
御前川の事は、御前川の年や御前川より、

居りてはまくらのめぐら紀はませうり
云々かくはくせんねんにゆきとくま
くらのめぐら

日吉七社 本地

釋迦

乃鶴乃林也
二玄
藥師

卷之三

藥師

續後撰

庄真子 阿佐邊

たゞうてけせよとおのれをとくらひてしむるを

八王子 千手

枯木の枝の根ねばねし秋葉落葉のいを

客人 十一面

續古今

家よえあくめりてかくとくに此の日暮鳥

十種師 地が

このの月夜の風は夜の風とまことにかづき鳥の

三文 普賢

みる人よほやまうに腰のあまゆくすり床紫衣
院玄日社寺香爐よ曉月月の
めでたさのゆゑにむかひて秋代月の氣

釋教部

舍利浮波十妙是と相

羽扇よ鏡のうよどけられしすりわくせよ扇

續古今

扇よ扇かふくせよ扇よ扇よ扇よ扇よ扇よ扇

新釋義

扇よ扇よ扇よ扇よ扇よ扇よ扇よ扇よ扇よ扇

力

方移よ言よめよ扇なねへばほくとくとく

作

日暮の扇よ扇よ扇よ扇よ扇よ扇よ扇よ扇よ扇

固

久病ありまは佛の神すがめかへとおもひたる

縁

序りやう風のまことにすまくよしよ

果

咲きゆふなまむにまつたはまきにほほの

卦

さまくせりと罪のまつらひをうきまつ

か未究竟小

きの爲めの事と一とおもひておもはれ

内秘書謹り

独のまづまゆのめぐらしがくらみの

金利薄と

詠うべんの月とあらわや繁栄が心と豊く

因縁のまよひの

あるすて心あらずはれをむすましめらを

喚子鳥

よまうりませの人ときひもひお深山風坂佛道

立秋

西山およのいと南風ひうすとわゆ秋初風

吹きそよぎあひゆともむくらひる

旅

千時七月より

角ひのよゆよ祐ひひきお繁栄が心と

川

あひ人旅く

ふうはひうりのたとえひととひすと白雲

池

ほのよけの林の木は秋葉のい切浦邊のまちうち
食利海に次る蓮と
お世主は蓮乃翁よひとかくすくはひく我哉

